

## ダン・クワン氏によるワークショップと講演

村山瑞穂（外国語学部英米学科教授）

2009年10月14日および15日に、ロサンゼルスに拠点を置いて活動するパフォーマンス・アーティスト、ダン・クワン(Dan Kwong)氏によるワークショップと講演会を本学で開催した。当初の計画では、日系三世の作家、カレン・テイ・ヤマシタ(Karen Tei Yamashita)氏による講演会の開催を予定していたが、彼女とのスケジュール調整がうまく行かず、実施者である私の個人的な事情もあり、急遽、計画を変更することとなった。

### アジア系アメリカ研究の課題

私は、近年、アジア系アメリカ研究、その学際的研究のなかでも、文学・文化領域に関心を持ち、研究活動を行っている。研究活動の中心母体は、「アジア系アメリカ文学研究会」という学会であり、今回、ダン・クワン氏、カレン・テイ・ヤマシタ氏によるプログラムの企画構想は、この学会との繋がりを通して可能になった。

アジア系アメリカ研究は、公民権運動を経て、白人中心を暗黙の前提とする同化主義から個々の人種・民族の独自性と調和を重視する多入種・多民族主義へ向かうパラダイム変動のなかで生まれた新しい学問分野である。もともとアメリカにおける人種・民族的マイノリティのアイデンティティの確立と政治力の結集を目的としていたアジア系アメリカ研究だが、その課題は時代の変化とともに大きく変化してい

る。例えば、人種・民族のアイデンティティや差別にまつわる問題は、ジェンダーや階級、セクシャリティなどの複合的なアイデンティティの問題系を抜きには議論できないこと、つまり、問題はこれらが複雑に絡み合っているところにある、という認識や、社会のグローバル化のなかで、もはやアメリカとアジアという二項対立的な視点からは、これらの問題を解決できない、といった問題意識の変化などがある。

### カレン・テイ・ヤマシタ氏：アジア・アメリカ・ブラジル

最初に公演依頼を予定していた日系アメリカ人三世のカレン・テイ・ヤマシタ氏は、すでに三つの小説を出版しているが（その一つ *Through the Arc of the Rain Forest* [1990] は『熱帯雨林のかなたに』という邦題で翻訳されている）、彼女はアジア（とくに彼女のルーツでもある日本）、アメリカという東西の軸にブラジルという磁場を組み込み、従来のアジア系アメリカ文学にないボーダーレスな時代を映すダイナミックなテキストを生み出すことに成功している。

実は、ヤマシタ氏自身、ロサンゼルス生まれだが、中西部の大学へ進学、大学時代に日本留学を経験し、その後ブラジルで日系ブラジル人についての文化人類学的調査に携わり、そこでブラジル人男性と結婚して二児をもうけ、さら

にその後、一家でロサンゼルスに移り住む、といったグローバルな移動を体験している。しかも、1998年から一年間ほど日本の瀬戸市に滞在しており、本学にも近い保見団地の日系ブラジル人との交流もあり、その時の経験をエッセイ、日記、短篇小説、宣伝のチラシ、写真、新聞の断片などをコラージュし、英語、日本語、ポルトガル語が入り混じる既存の文学ジャンルを逸脱したテキストから成る *Circle K Cycles* [2001] を出版している。

#### ダン・クワン氏：日系の母と中国系の父

一方、ダン・クワン氏は、自らの物語を舞台上で演じるパフォーマンス・アーティストとしてアメリカ国内外で活躍している。脚本、演出、演技など、すべて自分で行い、一人芝居が中心だが、デュオで演じる場合もある。ソロ・パフォーマンスとは、低予算で行える効果的なパフォーマンスを狙って、70年代に女性アーティストたちによって始められた演劇ジャンルであり、現在では様々なアーティストたちによって広く演じられ続けている。

日系アメリカ人の母と中国系の父の間に生まれ、多民族・多文化都市ロサンゼルスで育ったクワン氏は、他者理解の土台は自己探求であり、共生社会の実現には、自己の中の様々な抑圧を認識し、解放することこそが重要だ、と考える。彼にとっての抑圧の解放とは、白人中心の社会環境のなかで、人種的マイノリティとしてこうむっている抑圧、白人中心の価値観を内面化してしまっている自己認識からの解放ばかりではない。加えて、階級の問題や、男性中心主義や同性愛嫌悪など、前に述べた複合的なアイデンティティの認識を前提に幅広い問題を取り上げている。

#### ワークショップ：他者理解の土台としての「自己探求」

今回、まず初日に、クワン氏がアメリカ各地や、最近ではタイや中国などアジア諸国の大学を訪れて行っている身体運動と言葉を使った自己解放のためのワークショップを本学の多目的ホールで開催した。ここに、性別や年齢など異なる背景を持つ学生20人ほどがボランティアで参加し、貴重な経験をした。

体全体を使ってあるポーズを作っって自分の名前を紹介することからはじめて、部屋のなかをぐるぐる回りながら「このなかで最も知的に見える人の肩に触れてみよう」などといった他者認識を意識化するゲームなど、身体的な動きとともに他者に対する自己認識や他者からの自己についての認識を体感する作業を様々なゲームを通して行い、最後に自己のジェンダー認識についての最も古い記憶をそれぞれが物語にして発表した。物語は日本語で書き、日本語で発表した。その他の活動はすべて英語で行った。したがって、この場所は、実践的な英語コミュニケーションの場ともなったことを付け加えておく。

わたしはこのワークショップを見学していたのだが、参加者が楽しみながら身体と心を自由に動かし、今回の場合は、最終的に人々を縛るジェンダー観がいかにか社会的に作られたものであるかを認識してゆくプロセスとともに、この活動を通じて参加者の間に芽生える人間としての結び付きに深く感動した。その後は、生協のラウンジでクワン氏を囲んでささやかなディナー・パーティを開き、参加者間の交流を深めた。

## 自己語り

翌日の講演会(通訳付き)では、” Personal Storytelling—As Vehicle of Liberation” (「自己語り—解放の手段として」)というタイトルで、自らのパフォーマンスを収録したDVDを見せながら、クワン氏が創作活動の原点と基本理念について語った。そこでまず強調されたことは、自分を語ることによって、人は自分自身や自分の経験について他者との違いを発見するが、それは、自己認識、自己を肯定的に捉えるために不可欠の行為である、という点だ。さらに、彼のパフォーマンスの特徴として、彼自身が抱える多面的・複合的な文化的背景に培われたバランス感覚が指摘された。

前にも述べたように、クワン氏は、両親から日本と中国の文化を受け継いでいるが、家庭の外の社会環境はいうまでもなくアメリカ文化に支配されている。両親は離婚し、母に引き取られるが、その後も父とは交流があった。父は裕福な階級、母は労働者階級に属し、家では母と三人の姉のもとで、芸術的、女性的な文化に慣れ親しむ一方で、成績優秀な姉とは異なり、勉強よりはスポーツが大好きな少年だった。クワン氏は、多様な文化的価値観の一部だけを極端に強調することは有害であると考え、それぞれの文化やその歴史を知り、それらが互いの態度や感情に与えている影響を知ることが、他者理解の第一歩であると主張するのである。

例えば、野球選手とサムライを合体させたコスチュームを身につけ、野球と武術の身体表現

を取り入れて演じられる、メジャーリーグの選手になることを夢見ていた少年時代を回想する初期の代表作、*Secrets of The Samurai Centerfielder* [1989]を始め、イラストや活字、ビデオ、スライド、音などのマルチメディアを駆使して自伝的物語を演じるソロ・パフォーマンスは、ユーモアとペースにあふれ、文化の差異と多様性について観客の認識を深めさせてくれた。

## 多文化共生のための芸術の

講演後の質疑応答においては、学生たちから英語、日本語で興味深い質問が寄せられた。とくに、「自己について語ることはひいては他者理解になるというが、在日韓国人のボーイ・フレンドと互いにそれぞれのことを語り合うと、けんかになってしまうことがある。自己を語ることには危険性が伴うのではないか」という鋭い質問が向けられた。それに対して、クワン氏は、「自己を語るには安全な場所が必要だ」と答えていた。つまり、ワークショップや舞台といった日常を離れた時空間でこそ、自由な自己語りの安全性が確保されるのだ。多文化共生のための芸術の意味、重要性の一つは、まさにそこにあるといえるのではないだろうか。追記として、クワン氏のパフォーマンスの一部の動画は、彼のホームページで見ることができる。

( [http://www.dankwong.com/pages/home\\_1.html](http://www.dankwong.com/pages/home_1.html) )



Dan Kwong 氏を囲む懇親会